

償い

作 : 岡崎道成

演出 : 小川政弘

★登場人物

わたし(ナレーターも)

わたしの息子 裕二

栗田老人(栗田ナレーションも)

二等兵の栗田

栗田の妻 和子

中隊長

兵士

村長

山崎牧師

<前編>

—新幹線発車ベル。車内で。

裕二 お父さん、あそこ空いてる！

わたし ああ。…あの、ここ、いいですか？

栗田老人 あ、どうぞどうぞ。…よかったら、窓側に。

わたし あ、いえ…

栗田老人 構いませんよ。どうぞ

わたし すみません。祐二、お礼言いなさい。

裕二 おじいさん、ありがとう。

栗田老人 ああ、祐二君っていうのかい？ 何年生？

裕二 4年生。

栗田老人 4年生か。いい子だね。

ナレーション わたしたち親子は、昨日からの1泊2日広島の旅を終え、家に帰ろうとしている。息子の祐二は、今回初めて乗った新幹線にすっかり夢中のようなようだった。もう70を超えているだろう、席を譲ってくれた身なりのいい老人も、目を細めて笑っている。

栗田老人 名古屋までですか？
わたし ええ。この子が夏休みの宿題で、戦争について作文を書くようにって言われてましてね。それで、広島へ行った帰りなんですよ。

栗田老人 ああ、そうですか。じゃあ、原爆資料館とか回られて。
わたし ええ。この子もかなり驚いたようです。この平和が当たり前でない時代があったということ、知ってくれればと思うんですがね。

栗田老人 そうですか。あなたのような若い方が、戦争の記憶をしっかりと受け継いでいく。本当に大切なことですよ。

わたし あ、わたしもこの子の宿題がなければ、普段はそんなことあまり意識しません。でも、今回広島へ来たことで、忘れてはいけないことだな、という気持ちになりましたね。

栗田老人 …戦争は本当に、悲惨なものです。実はわたしもあの時代、戦争に行ってみてね。

わたし ああ、そうなんですか。

裕二 お父さん、今の見た？ すれ違うの、あつと言う間。

わたし (笑)そりゃ、両方とも時速200キロ以上だからな。

裕二 時速200キロって、1秒でどのくらい？ ねえ。

ナレーション この人が銃を持って戦地へ行っていた。祐二の相手をしながら、わたしは戦争が妙に生々しく感じられた。
駅弁を食べて間もなく、祐二ははしゃぎ疲れたらしく、わたしにもたれ掛かるようにして眠ってしまった。老人もうつらうつらとしている。わたしは荷物の中から本を取り出して読んでいた。

栗田老人 …おや、それは聖書じゃありませんか？

ナレーション 目を覚ました老人が、わたしの読んでいる本に気づいて言った。

わたし え？ ええ、そうです。

栗田老人 失礼ですが、あなた、クリスチャン？

わたし いえ、そういうわけじゃないんですけど、聖書には興味があって、ときどき読んでるんです。

栗田老人 そうですか。実はわたしはクリスチャンでしてね。

わたし あっ、そうなんですか。へえ。じゃ、いつも教会とか行かれてるんですか？

栗田老人 ええ、日曜日はね。どうですか、聖書。

わたし いやあ、とても面白いというところまで行きませんが、少なくともいい加減な本じゃありませんね。それは分かります。

栗田老人 ええ。聖書は、わたしたち人間が知っておかなくてはならない、大切なことが書いてあります。神について、人間の本質について、そして、救い主イエス・キリストについて。

わたし 信じれば救われるって言ってますよね。…救いって、何ですかね。

栗田老人 わたしはね、聖書の言葉から本当の自分の姿を教えられたんですよ。救われなければならない本当の自分の姿をね。

ナレーション わたしが彼を見ると、彼は少し遠くを見るようなまなざしになっていた。わたしはふと、この老人の話を聞いてみたくなった。初対面の人に失礼かとも思ったが、旅行中の気安さから、わたしは尋ねた。

わたし あの、よろしければ、その、クリスチャンになった時のお話を聞かせてください。

栗田老人 ええ。…わたしは、かつて日本兵として、中国に行っていたのです。わたしも戦争に行く前は、あなたのような普通の父親でした。妻と、息子、娘が1人ずつ。よく息子を連れて近くの川へ釣りに行ったりしましてね。幸せな家庭でしたよ。しかし、昭和19年春のある日、とうとうわたしにも召集令状が来ました。

村長 栗田英二郎君のご入隊を祝し、バンザーイ！（バンザーイ）、バンザーイ！（バンザーイ）

村民 ♪勝って来るぞと 勇ましく
誓って国を 出たからは
手柄立てずに 死なりようか…

栗田ナレーション 軍隊に入ってしばらく訓練を受けた後、わたしは中国南部派遣軍に配属されました。いきなり最前線ですよ。右も左も分からない初年兵のわたしたちを迎えてくれたのは、意外にも心の広い上官と、仲間たちでした。

中隊長 おい、栗田二等兵、これも食え。なかなかいけるぞ。

栗田 いえ、自分は十分であります。中隊長殿が食べてください。

中隊長 バカ、遠慮するな。腹が減っては戦ができません。飯を食うのもご奉公のうちと心得ろ。

栗田 は、はい。では頂きます。

栗田ナレーション 食事の後は座談会でした。

中隊長 今日は、それぞれの故郷の話をすることにしよう。栗田、君はどこの生まれだ？

栗田 はい、自分は横浜生まれであります。

中隊長 はっはっは。栗田、この時間は無礼講だ。「自分は」とか、「貴様は」とか言う必要はない。「君」と「僕」でいいんだ。

栗田ナレーション わたしはほっとしました。「軍人も人の子だ」、そう思いました。しかし、その温かい雰囲気も、戦地の中国人たちに対しては全く無縁でした。

ある日、わたしたち初年兵は訓練場で、細長い壕を掘られました。深さ1メートル、幅1メートル、長さは10メートルほどの壕で、少し離して2本掘りました。壕の縁は人が座れるくらいの段になっていました。すると、上官が中国人

らしい男を連れてきて、壕の段の所に座らせたのです。

栗田 なあ、どうするんだろう、あいつ。

兵士 どうやら後ろ手に縛られてるな。

栗田 ゲリラかな。

兵士 さあな、民間人かもしれん。

中隊長 栗田二等兵！ 出ろ。

栗田 は、はい！

栗田ナレーション わたしが前に出ると、上官はわたしにマッチを差し出しました。

中隊長 お前、あれに点火してこい。

栗田 は！ あれ、と言いますと…。

中隊長 あれだ。あの爆薬が見えんのか？

栗田ナレーション 上官が指差したその中国人の後ろには、ダイナマイトが2本、くくりつけてあったのです。

中隊長 つけたらすぐに向こうの壕へ飛び込め。吹き飛ばされるからな。

栗田 あ、あの…。

中隊長 どうした？ さっさとつけてこい！

栗田ナレーション 頭の中が真っ白になりました。便衣という、中国の普段着を着ていましたから、その中国人は兵士ではないように見えたんですが、あるいは民間人を装った兵士だったのかもしれない。しかし、上官の命令は絶対です。口答えは許されません。わたしは震える手で導火線に点火すると、一目散に向こう側の壕に飛び込みました。

—ドッカーン！！—

栗田ナレーション わたしたちは、爆発した跡を見に行きました。中国人が座っていた壕には、骨も肉も、形あるものは何も残っていませんでした。

中隊長 これが爆薬というものの威力だ。よく覚えておけ。

栗田ナレーション それは、ほんの始まりでした。中国での軍隊生活は、わたしを、人を豚や犬のように扱い、残酷に命を奪っていく、そのようなことを平気でできるような人間に変えていったのです。

<後編>

—戦場—

兵士 一人も生きて逃すな。女子供もすべて始末しろ。

栗田 1列に並ばせろ！ 後がつかえてるんだ、さっさとしろ！ 撃て！

—ズダダダ…—

栗田ナレーション 日本の敗戦で戦争が終わり、帰国してしばらくは生活していくのが精一杯で、かつての自分の行動を振り返る余裕など全くありませんでした。しかし、生活もだんだん落ち着いてくると、いったいあの戦争は何だったのか、自分がしたことは何だったのかと、自問することが多くなっていったのです。そんなわたしの姿を心配して、妻がわたしに尋ねました。

妻 和子 ねえ、あなた。最近めっきり口数が少なくなったじゃないの。どうしたんですか？ 何か、心配事でもあるんですか？

栗田 …和子。今の僕は、本当の僕なんだろうか？

和子 え？ 何ですか？

栗田 今の僕が、本当の僕なんだろうか？

和子 あなたは、あなたじゃないの。本当も何も、あなたはあなたしかいませんよ。

栗田 いや、そうじゃなくて、この、君の夫で、孝男と繁子の父親の今の僕と、あの、中国での、あの、中国にいた僕と、どっちが本当の僕なんだ？

和子 あなた… 戦争のことを考えてるの？
栗田 君には詳しく話してないが、僕は、あそこで…。
和子 いいの、言わなくてもいいの。あなたが苦しむ必要はないわ。仕方なかったのよ、戦争だもの。…忘れて。ね、今のあなたが、本当のあなたなのよ。無事に帰ってきたんじゃないの。ね？
栗田 和子…。

栗田ナレーション 日本の侵略戦争の実体が次第に明らかになり、各地で日本兵が行った非人道的な振る舞いが裁かれました。次々に処罰される戦争犯罪人たちのニュースに触れるたびに、わたしは、自分も彼らと同じように罪を償うべきではないかと思うようになっていったのです。

— 踏み切りを電車が通過する —

栗田モノ 今度だ。今度電車が来たら飛び込もう。

栗田ナレーション そう思いながら何本かの電車をやり過ごしました。死んで償うべきだという自責の思いと、自分が死んだら残された妻や子はどうなるんだという声が、わたしの頭の中を交互に行ったり来たりしていました。

— 踏切音 —

栗田モノ 何をためらっているんだ？ 自分は何人もの中国人を、家族の目の前で殺したのだ。

栗田ナレーション 今度こそ本当に飛び込もうと顔を上げた時でした。目に入ってきたのは、踏み切りの向こう側にあった看板の文字でした。

栗田モノ 「義人はいない。一人もいない…。」

— 電車が通過する —

栗田ナレーション わたしは、看板が掲げてある建物の前に近寄り、もう一度それを眺めました。

栗田 「義人はいない。一人もいない。 ー聖書ー」

栗田ナレーション 屋根に十字架が付いたその建物の中に、わたしは引き付けられるように、ふらふらと入っていったのです。

栗田 あの…。

山崎牧師 いらっしゃい。…どうかなさいましたか？

栗田 あの、通りに出ている看板を見て、つい…。

山崎 看板を？ そうですか。さあ、どうぞお掛けください。あ、わたしはこの教会の牧師の山崎です。

栗田ナレーション わたしは、初めて会ったその人、山崎牧師の前で、今までだれにも話したことのない、戦争での数々の出来事を赤裸々に話しました。もちろん、その時、自殺するつもりでいたことも。時折、涙で声を詰まらせるわたしの話を、山崎牧師は最後まで静かに聞いてくれました。

山崎 栗田さんとおっしゃいましたね。ひとつお聞きしてもいいですか？

栗田 え？ …ええ。

山崎 あなたは、そんなに自分が罪深い人間だと思っていらっしゃるのですか？

栗田 …思っています。人間として、^{ゆる}赦されないことをしてきたと思います。

山崎 それで、死のうとされた。

栗田 …そうです。

山崎 死んだら、罪が赦されると、あなたは思いますか？

栗田 …分かりません。でもわたしは、多くの人の命を平気で奪いました。だから、わたしも死んでおわびすることぐらいしか…。

山崎 栗田さん、人の罪は、死をもって償えるものではないんです。聖書にはこう書かれています。「人は、一度死ぬことと、死後に裁きを受けることが定まっている。」

栗田 裁き…。

山崎 人は、自分の罪を必ず償わなければなりません。人の犯した罪は、いつのまにかどこかへ消え去ってしまうものではありません。このことは、栗田さんがおっしゃる通りです。

栗田 …はい。

山崎 そして死は、償いではありません。本当の償いは、一度死んだ後、神様の前での裁きから始まるのです。栗田さんは、表の看板を見てこられたのですね。「義人はいない。一人もいない。」この言葉は、神様の目から見れば正しい人は一人もいないと言っているのです。神様から見れば、中国で多くの人の命を奪ってきたというあなたも、牧師をしているわたしも、まったく同じ罪人です。

栗田 それは… わたしと先生が同じというのは、分かりません。

山崎 もしわたしがあなたのように軍隊に入り、中国へ行っていたら、わたしもあなたと同じようにしていたかもしれません。戦争のことだけではありません。どんな悪人のことを考えてみても、自分も同じ境遇にいたなら、同じ罪を犯すかもしれない。絶対に自分はしないとはいえないのです。わたしには、どんな悪いことをする可能性もあります。それが、すべての人が持っている、罪の性質です。

栗田 罪の性質…。

山崎 わたしもときどき、自分の中にいろんな欲望や、悪い考えがあることに気づきます。人に善いことをしたいのに、できない自分に気づかされます。してはいけないと思うことをしてしまう自分に気づかされます。どこへ行って何をしたかということではなく、わたしは、自分の中にそのような罪の性質が潜んでいることが、よく分かります。

栗田 それでは、人はどうやってその罪を償うのですか？

山崎 わたしは、わたしが受けるべき罪の罰を、既にある方が負ってくださったことを知りました。わたしはそれを信じ、受け入れました。この方こそ、十字架に架かって死なれた救い主、イエス・キリストです。聖書にこう書かれています。「今は、イエス・キリストにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊みたまの原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。」栗田さん、イエス・キリストは、あたなが償

うべき罪の重荷を、代わりに負ってくださいました。このことを信じれば、あなたの罪はイエス・キリストの十字架の事実によって赦されるのです。あなたはこのことを受け入れますか？

—新幹線車内—

わたし

それで、栗田さんはクリスチャンになられたわけですか。

栗田老人

ええ。わたしは、自分が戦争で、人を人と思わず平気で殺したことが罪なんだと思っていました。わたしだって戦争に行かなければ、平凡な夫、平凡な父親のはずだった、戦争で自分の人生は狂ってしまったと。しかし、わたしの中には、もっと深い、神の裁きの前に滅びるしかない罪の性質がある。それが本当の自分なんだということを、その時初めて知ったのです。「義人はいない、一人もいない。」この聖書の言葉は、あの時まさに死のうとしていたわたしを突き刺しました。そして、このわたしの負うべき罪の重荷を、代わりに負ってくださった方がいる。神の言葉である聖書は、そのことを、わたしに教えてくれました。あの時、救いはわたしのものになりました。

ナレーション

わたしは、手に持っていた聖書をぱらぱらとめくった。信じれば救われる。うますぎる理屈のようだが、もし栗田さんの言うように、人の中にどす黒い罪の性質があるとしたら、そしてそれに直面してしまったら、きっと救いを受け入れざるを得ないのかもしれない。

栗田

ぜひ、続けて読んでみてくださいね。

ナレーション

栗田さんはそう言って、わたしにほほえみかけた。列車は間もなく、名古屋に着こうとしていた。

<完>
